

「お疲れ様でした」

店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は黄色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから僕は、視界いっばいに広がる街を眺めた。

なんとということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。

魔術王による人類史焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

「……………」

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

「……………」

胸の内を、万感の思いが満たす。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えていてる。

そこで得た出会いや別れも、何一つ忘れることなく鮮明に記憶している。

——我が親愛なる、唯一無二の同盟相手のことも。

「……帰ろう」

僕もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。

大橋を渡った先にそのアパートは存在する。

「……地震怖いなあ」

十人中十人がオンボロと言うであろうその外観に苦笑が漏れる。

儉約が大切、なんてフアラオの癖に妙に人間臭いことを言つてこのアパートへの居住を決めた相方は、住めば都ということで慣れ始めているようだけど、個人的にはもう少し綺麗な所に引っ越したい所存だ。

なにせ大事な、きつと世界で一番尊敬する人を住まわせるのだから。

……まあ、今のところ主に予算の都合で引っ越しの予定はないんだけど。

甲斐性なしな自分に半ば呆れながら錆びついた階段を上る。

二階の端。

日当たりだけはいい角部屋の、これまた古臭いチャイムを押すと、ドアの向こうから。パタパタと足音が届き、そして、

「おかえりなさい、マスター」

そんな、落ち着いた声が僕を出迎えてくれた。

俗に縦セタと呼ばれる衣服で身を包んだ普段着姿の彼女は、まるで砂漠の中で煌めくオアシスのようで。

その穏やかな微笑みを見ただけで、今日一日の疲れが吹き飛ぶのが実感できた。

「うん、ただいま。……ただいま、ニトクリス」

誰よりも信頼する同盟相手に、僕は心からの笑顔を返した。

世界を救った後、僕はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。

元々、魔術の腕はからつきだったから、カルデアの研究者として残るとい
は少し無理のある話だった。

ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後
には快く送り出してくれた。

『どうか元気で。君に最高の幸福があることを祈るよ』

涙ながらに僕の手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えてい
る。

そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、僕はカルデアを出ただけど
……。

「今日はパエリアにしてみました」

「ばえりあ……?」

言いながら卓袱台へフライパンを載せた僕に、ニトクリスは首を傾げている。

それにつられるように傾く兎の耳のような髪に小動物的な可憐さを感じながら、僕は言葉を続ける。

「地中海の方の料理だね。エジプト料理はあの辺りの料理と似てるって聞いたから。これならニトクリスも気に入ってくれると思うんだけど」

「どうかな? と問いかける僕に、彼女は驚いたと言いたげに目を丸くしてから、嬉しそうに微笑んで見せた。

「私のためにメニューを選んでくれたのですか……お気遣いをありがとうございます。まず、マスター。もしあなたが下僕なら、ミイラからマミーに一気に昇格していたところですよ」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。称賛の程度がいまいち読み取れないけど」

「そ、そうでしょうか? で、では率直に感激した、と。あなたの気配りは大変よ

いものです。私も見習わなければなりませんね」

「そんな、ファラオに気配りさせるなんて恐れ多いよ」

くすりと笑うニトクリスに、僕は慌てて首を振る。

彼女は偉大なるファラオであり、そして僕らのカルデアにおいて英雄王の次に古株という超大物だ。オジマンディアスや他のファラオに対してならともかく、僕みたいな一般人に気配りなんてさせるわけにはいかない。

だというのに、ニトクリスはまっすぐに僕を見つめながら、

「私は確かにファラオですが、ええ、今や真なるファラオですが、私を完成させたのはあなたという唯一無二の同盟者がいたからに他なりません。故に私とあなたは対等。傅くことも、傅かれることもない、互いを尊重し合う関係に我々はいます」

ですから、とニトクリスは僕に向かって微笑みを浮かべ、

「私にも気配りの義務があります。マスター、あなたと対等であるために」

「ニトクリス……」

じいん、と胸を痺れさせながら名を呼んだ僕に、ニトクリスはこくりと頷いて、

「……具体的に何をすればいいかは未だ測りかねているのですが」

「ええ……」

「いえ、気配り自体はできると自負しているのです。あなたの部屋を掃除するように世話を焼いたり、ファラオ・オジマンディアスのような偉大なる方に仕えたりすることは今の私でもできます。ですが、あなたのような対等な関係を築いた相手へのささやかな気配りというのは、私には経験がなく……」

どうしたものか、と眉間にしわを寄せるニトクリス。

偉大なるファラオが僕みたいな小童に心を砕いてくれるなんてありがたい話だ。

しかし、気配りか。

別にいいんだけどな、そんなこと。

僕だってそこまで立派なことができてるわけでもないだろうし。

それに何より、

「僕としては、ニトクリスが一緒にいてくれるだけで嬉しいんだけどな……」

「え？」

「え？」

疑問符を浮かべながら視線を向けた先、ニトクリスは少しだけ顔を赤くしながら、目をぱちくりとさせていて。

「今、何と？」

「……声に出てた？」

「……………」

こくりと頷くニトクリス。

「そっか……」

僕は天井を仰ぎ見た。

「しにたい……」

「き、聞かなかった！ 私は何も聞きませんでした！」

「早速の気配りありがとうニトクリス。そうしてもらえると助かるよ」

「は、はい……で、ですがマスター」

「何？」

熱くなる顔を自覚しながら視線を向けた先、ニトクリスはこほんと咳をして、

「ふあ、フアラオとしては不敬と言わざるを得ませんが、同盟者としては、その…

…喜ばしいと、思います、ええ」

「そ、そっか……」

「はい……」

「……………」

「……………」

そうして二人、沈黙を保った後、

「……とりあえず、ご飯食べよつか。このままだと冷めちゃうし」

「そ、そうですね！ いただきますよう！」

賛同してくれたニトクリスと二人、両手を合わせる。

「いただきます」

号令をかけ、僕らの夕食が始まった。

始まったんだけど……。

「……………」

「あ、あの、ニトクリス？」

「は、はい！？ な、何でしょうか、マスター？」

「あ、いや……。パエリア、味どう？」

「た、大変美味です……」

「そっか……」

「……あの」

「ん？」

「いえ、なんでもありません……」

「そう……」

「はい……」

泡のように浮いては消える会話を重ねながら、彼女はちらちらと僕を見ては目を逸らしていた。

『マスター！』

カルデアを出た僕を、親愛なる同盟者ことフアラオ・ニトクリスは慌てて追いかけてきた。

『ぜえー、はあー……』

『そ、そんなに慌ててどうしたのニトクリス？ あ、もしかして僕、何かカルデアに忘れ物でもしてた？』

『い、いえ、そうではなく……わ、私もあなたの旅に同行します』

『え……？』

突然の宣言に呆けた声を漏らした僕の眼前、ニトクリスは息を整えながら、

『あなたと同盟を結んだ際、私はあなたと共に在ることを誓いました……そして、その同盟は未だ破棄されていません……』

『いや、でも……』

『はあ、ふう……遠慮はいりません。私は支配者たるフアラオですが、貴方の同盟相手です。畏れながらも、遠慮はなしでお願いします。……そうお伝えしたはずですよ』

『ニトクリス……』

汗を流しながら優しく微笑む彼女に、僕は言葉を失った。

人理が修復された今、同盟なんていつだって破棄できたはずだ。

彼女が僕のサーヴァントである意味は、意義はないに等しい。

でも、それでも彼女は僕と共に在りたいと言ってくれた。

『我が唯一無二の同盟相手。どうかこれからも、あなたの背中を押させてはくれませんか？』

そんな彼女の問いかけに、僕は首肯する他なかった。

彼女にとってそうであるように、僕にとっても彼女は、唯一無二の同盟相手に他ならなかったから。

そんなわけで、僕とニトクリスは英霊たちによって救われたこの世界で一緒に過ごしている。

というか、一緒に生活している。

……いやまあ、別に言い換えなくてもいいことだとは思うんだけど。

一緒に生活、と言うとなんだか雰囲気が変わるといふかなんとか。

分かりやすくなると思うんだ。あるいは伝わりやすくなる。想像しやすくなる

言ってもいい。

どういうことか？

そうだな……たとえば、

「♪」

「……………」

浴室でシャワーを浴びるニトクリスの鼻歌を聞きながら一人悶々としている僕の気持ちとか。

六畳一間のこの部屋は、当然のように浴室と部屋の距離も近かった。

たとえベランダに逃げ込んでも鼻歌とシャワーの音が聞こえてくるのはさすが安アパートといったところ。

未だ未成年でお年頃な僕にとつてこの状況は精神衛生上非常によろしくないの
で、極力早急に引越したいところなんだけど、引越しの話を持ち出す度に相手
であるニトクリスはやんわりと拒否してくる。

『確かに、フアラオの居住まいとしてはいささか華やかさに欠けますが、雨風をし
のげて浴槽や便所もあるとなれば問題はないでしょう』

『ホントに？ ファラオ的に問題ない？ 部屋中金ぴかとかじゃなくて大丈夫？』

『はい。このくらいの広さであれば、私一人で掃除できますから』

『そんな老夫婦の引越し先の決め手みたいなこと言われても……』

ううむ、と頭を抱える僕に、ニトクリスは穏やかな微笑みで、

『少々狭いですが私は気に入っていますよ、マスター』

『……そう？』

『はい』

『……なら、まだしばらくはここで』

とまあ、そんなわけで当分引越しは出来なさそう。

結果として、僕はまた一人悶々と永遠にすら思える時間を過ごしている。

♪

風呂に入っている間、ニトクリスは絶えず鼻歌を奏でている。

余程上機嫌なのだろう。彼女が幸せそうで何よりだ。

『一緒にいるだけで』なんて……ふふっ……』

「……………」

うん……できれば上機嫌の理由は知りたくなかったな……こういう時どんな顔をすればいいか分からないよ……。

勝手に一人で茹る僕を他所に、風呂場からはきゅつとシャワーが止まる音がして、それからしばらくして、

「お風呂、いただきました」

ほかほかと湯気を上げながらニトクリスが出てきた。

天空の神にして冥界の神、そしてファラオである彼女は先日ショッピングモールで購入したピンク色のパジャマに身を包んでいる。シンプルなデザインだがメジエド様模様が可愛いパジャマだ。普段着の縦セタといい、ニトクリスは何を着ても似合うから困る。整った容姿に加えてプロポーションがいいからだろうな。

豊かに膨らんだパジャマの胸の辺りをぼけーつと眺めていると、彼女はきよとんとした顔で、

「? 何か変ですか、マスター?」

「あ、いや……ニトクリスはプロポーションがいいなあ、つて」

「そうですね。そうでしょうとも。今の私は真なるファラオですから」

ふふんとドヤ顔をするニトクリスさん。可愛い。うちのフアラオ可愛い。

「ははーっ！ と平伏してもよいのですよ？」

「ははー」

素直にひれ伏した僕にニトクリスはくすくすと笑って、

「ふふ、冗談です。……私のこの身体も、あなたが私を更なる高みへと導いてくれたからこそ。感謝の念を禁じ得ません」

言いながら、ニトクリスは冷蔵庫から麦茶を取り出し、それを二つのグラスに注いだ。

「はい、どうぞマスター」

「ありがと。気が利くね」

「いえ、あなたがいつもしてくれていたことをしたまでです」

壁にもたれかかるようにして座っていた僕にグラスを手渡し、そして彼女は僕の隣へと腰を下ろした。

……近い。

僕と彼女の間が1センチほどしかない。

どうしようシャンプーのいい香りまでしてきた。でもこうして彼女が信頼を示してくれているのに離れてって言うのもよくないし……。

ううむ、と内心首をひねる僕の横、ニトクリスを両手で持ったグラスを傾け麦茶を一口。

こくりと鳴ったその喉に思わず目が奪われる。

「……快適ですね、現代は。冷えた飲み物をこうも簡単に手にすることができるようになって」

「ホントに。すごいよね科学技術」

「私が生きていた頃にはこんな便利なものは……私の、生きていた頃は……」

「ニトクリス？」

「……………」

突然黙り込んだニトクリスは、そつと僕の方へと身を寄せてきた。

身体の側面から。パジャマ越しに伝わってきた彼女の体温に、心臓が大きく鼓動を鳴らす。

「に、ニトクリス？」

「申し訳ありません、マスター。少し昔を思い出してしまいました」

「昔？」

「はい。……フアラオとなつてから、私は孤独でした。兄弟たちを謀殺した、そしてフアラオの玉座を穢した有力者たちに罰を与えるために、私はフアラオになりました。そこに、仲間と呼べるものはいませんでした。あの時の私には、家族も友も、仲間すらいなかったのです」

いつか聞いた話だ。

彼女がフアラオとなり、そして成したこと。

「あの頃のことを思い出し、恥ずかしながら孤独を感じ、そしてあなたの温もりを求めてしまいました」

笑ってください、と彼女は弱々しく笑う。

「真なるフアラオなどと名乗りながら、こんなにも弱い私を」

「ニトクリス……」

偉大なはずの彼女は、いつになく小さく見えた。

そこにいつもの堂々とした、それでいてどこか人間臭い彼女の姿はない。

何も偉業を為さなかったフアラオとしての卑下。

それは彼女に根付いた病であり、僕はそれを取り除きたいと強く願っていた。だから僕は、言葉を紡いだ。

「——ニトクリスは強いよ」

「え……？」

「天空の神にして冥界の神。複数のフアラオを相手取ってなお勝利を得ることができる偉大なるフアラオ。そんな君が弱いだなんて、冗談にしたってひどい話だよ」
「ですが私は……」

「孤独を感じて誰かを求めるなんて当然の事だよ。弱さなんてものじゃない。それは、持っていないきやいけないものだ」

「マスター……」

「だから、大丈夫。ニトクリスは強いよ。同盟者の僕が保証する」

微笑みを向けながら、僕は彼女に首を傾げてみせる。

「僕の言葉は信じられない？」

「……いえ、いいえ。マスター。我が唯一無二の同盟者。あなたの言葉は、信じる

に足る力強いものです。ですから、私は信じてみようと思います。……私の、ファ
ラオ・ニトクリスの強さを」

「うん。それがいいと思うよ」

「はい。ですが……」

「うん？」

何だろうと疑問符を浮かべた僕をよそに、彼女はこてん、と僕の肩へと頭を載せてきて。

「に、ニトクリス？」

急上昇した密着度に慌てる僕を、ニトクリスは照れ臭そうな微笑みを浮かべながら見上げて。

「ただ一人、対等なあなたに甘えてしまう私を——どうか、許してくださいね、マスター」

そう、甘えるように告げるのだった。

これは、そんな物語。

僕と真なるフアラオの、ありふれた日常の記録。

「マスター、どうぞこちらへ」

「いや、でも……」

「私とあなたは対等な相手。あなたが私を甘えさせてくれたのならば、私があなたを甘やかすのは道理でしょう」

「そうかなあ……」

「……私と寝床を共にするのはお嫌ですか？」

「……そんなことはない、けど」

「では、どうぞいらしてください。……今宵はたっぷり、甘やかして差し上げますから」